

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | マルクス = エンゲルスに於ける原始自生的共同体の認識   |
| Sub Title        |   |
| Author           | 加田, 哲二  |
| Publisher        | 慶應義塾理財学会  |
| Publication year | 1930  |
| Jtitle           | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.24, No.2 (1930. 2) ,p.105(1)- 167(63)   |
| JaLC DOI         | 10.14991/001.19300201-0001  |
| Abstract         |   |
| Notes            |   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19300201-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19300201-0001</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田學會雜誌

第二十四卷

第二號

マルクス・エンゲルスに於ける  
原始自生的共同體の認識

加田 哲 一

國家の社會に對する依存性はマルクス・エンゲルスの國家理論における一の特徴である。この點に關する彼等の初期の思想の展開は既に本誌上で説明する機會を得た(註一)。マルクス・エンゲルスの見解によれば、國家は社會の一の機關であつて、社會からの絶對的獨立性を有してゐるものではない。この點に關して、エンゲルスはそのシュミットに與へた書翰において次のやうにいつてゐる。

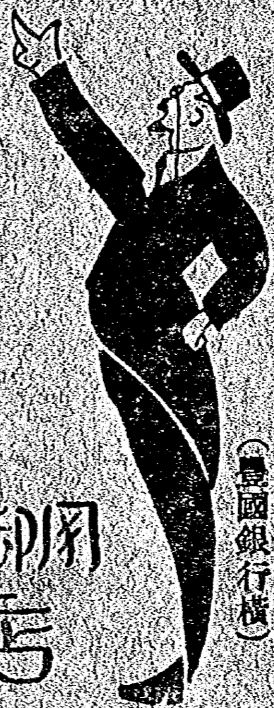
第二十四卷

(一〇五)

マルクス・エンゲルスに於ける原始自生的共同體の認識

第二號

一



(豊國銀行横)

優秀 正確  
期日 正確

御用制服 義塾 慶應  
秋山洋服店

芝區三田四國町六 電話三田(45)三七九二

この問題(生産對商品取引及びこれらの兩者對貨幣取引の關係についてのエンゲルスの見解)は分勞の見地からすれば、最も容易に了解が出来る。即ち社會は缺くことを得ない一定の共同機能を作り出す。この機能のために指名せられた人々は社會の内部における分勞の一の新たな部門を形成する。彼等はこれによつて、彼等の委任者に對してもまた特殊な利害を獲得する。彼等は委任者に對して獨立化する。かくして、こゝに國家が生ずるのである。すると、それから丁度商品取引の場合、更に進んでは貨幣取引の場合と同様になつて來る。即ち新たな獨立的主權力は、なるほゞ全體としては生産の運動に従はねばならぬが、しかし同時に、その權力に内在するところの、換言すれば、曾てそれに委任せられ、そして漸次に益々發展せしめられたところの、相對的な獨立性に依つて、再び翻つて、生産の諸條件と道程との上に、反作用することになるのである。それは二つの不平等な力——即ち一方には經濟的運動、他方には、出來得る限りの獨立性を獲得しようとするところの、そして一度び設定せられた以上、それによつてまた獨自の運動を賦與されたところの、新たな政治的權力——の相互作用に

外ならない。……國家權力の經濟的發展に對する反作用は三様であり得る。第一には、それは同一の方向に進み得る。その場合には、進行はより急速である。次には、それは反對の方向に働き得る。その場合には、それは方今苟くも大國民にあつては、到底長きに亘つて持續することは出來ない。或はまたそれは、經濟的發展の一定の方面を遮斷し、それに向つて、他の方面を指定することも出来る。この場合は結局前の二つの場合のいづれかに歸着する。だが第二及び第三の場合には、政治的權力が經濟的發展に大なる障礙を與へ、勢力及び物質の太々の浪費を惹起することは明かである。(註11)

註一 本誌昭和四年十一月號拙稿「市民的社會と國家」

註二 Die Briefe von Friedrich Engels über der Geltungsbereich der materialistischen Geschichtsauffassung.

I. Brief an Conrad Schmidt. Dokumente des Sozialismus. II. Bd. 14-15. Heft. Ss. 67-68. 久留間 敏造

譯「エンゲルスに與へたエンゲルスの手紙、同人社版、二一—二三頁。

かくの如く國家は、社會に對して、依存性を持續しながら、その獨立性を獲得せんとする一の機關である。乍併、國家は社會からの完全な獨立性はこれを獲得することが出來ない。引用文が示してゐるやうに、エンゲルスは、國家が社會からの相

對的獨立性を獲得するに至るといふ一般的提言は、これを例へば、エンゲルスの「家族、私有財産及び國家の起源」に見出すことが出来る。曰く「この對立、相對抗する經濟的利害を有する諸階級が、自己及び社會を無益な鬭争のうちに滅亡させないために、軋轢を妨止し、『秩序』の埒内に抑制すべき外觀上、社會の上に立つ權力が必要となつた。そして、この社會から出でて、而もその上に位し、それから益々無關係になりつゝある權力が國家である。」(註三) 乍併、階級鬭争における當事者たる兩階級の勢力が均衝するやうな場合においては、例外的に國家權力が外觀上の調停者として、一時ある程度の獨立性を得るが如き時期が現れるのである。例へば、貴族とブルジョアとが互に均衝した第十七世紀及び第十八世紀の絶對王制、ブルジョアとプロレタリアとが互に均衝したプロレタリアに對してはブルジョアとプロレタリアとの役割を演じた第一、第二のフランス帝國のボナパルト主義、及びビスマルク時代の獨逸帝國において、かゝる例を見ることが出来るのである(註四)。乍併、かくの如き場合においても、尙ほ國家は外見上の獨立性を保つに過ぎない。國家は階級支配の機關としての本質を失ふものではないのである。ビスマルク時代の獨逸について、エンゲルスは「住宅問題」の中で次のやうにいつて國家の社會的勢力に對する依存性を説いてゐる。

「現今の國家は住宅問題を救済することも出来なければ、またしようともしないことは、火を見るよりも明かである。國家は被搾取的諸階級、即ち農民及び労働者に對抗する所有者諸階級、即ち地主及び資本家の組織せられた全權力に外ならぬ。個々の資本家の欲しないことは、彼等の國家もまた欲しないのである。

乍併、獨逸においては、ブルジョアはまだ支配せず、國家は尙ほ一定の程度まで社會から獨立して活動してゐる權力であるから、従つて社會の全利益を代表し、一階級の利益を代表するものではない。斯くの如き國家は兎に角ブルジョア國家がなし得ない多くのことをなし得るのである。吾々はこの國家から社會的領域において、全然異つたものを期待してゐるのである。かういつて非難を(吾々の説に)浴びせることは出来る。

これは反動家の言葉である。乍併、事實において、獨逸においても、現在あるが



如き國家は、その中から國家が成長して來た社會的基礎の必然的產物である。プロイセンにおいては——而して、プロイセンこそ、今や標準的なものである。

——今尙ほ強力な大土地所有の貴族と併んで、佛蘭西におけるやうに、從來直接の政治的支配を、また英國におけるやうに、多少間接の政治的支配を闘ひ取らないで、比較的新らしい、尙ほ著しく脆弱なブルジョアジイが存立してゐる。乍併、この兩階級と併んで、急激に増加しつつあり、知識的には甚だ發達し、日々益々組織化されつゝあるプロレタリアが存立する。即ち吾々は、こゝに、舊時絶對君主制の根本條件と併んで、近代ボナパティズムの根本要件である土地貴族とブルジョアジイとの間の均衡、ブルジョアジイとプロレタリアの均衡を發見する。乍併、舊時の絶對君主制におけると同じく、近代ボナパルト的君主制においても、事實上の政府權力は、特別なる士官及び吏僚の掌中にある。而して、これを補充するものは、プロイセンにおいては、一部分は彼等自らであり、一部分は長子相續の小貴族であり、甚だ稀には大貴族から、最小の部分はブルジョアジイである。社會外及び謂はゞ社會の上に存立するかに見ゆるこの間の獨立性が、社會に對

して、獨立性の外見を國家に附與するのである。

プロイセン(獨逸新憲法において、優越を得た後の)において、かゝる矛盾に充ちた社會狀態から必然的結果として發達して來た國家形態は、假裝的立憲主義であつた。而してこの形態は、舊時の絶對君主制の現在の解消形態であることにも、ボナパルト的君主制の存在形態である。プロイセンにおいては、この假裝立憲主義が一八四八年から一八六六年まで絶對君主制の徐々な死滅を隱蔽すると共に媒介して來た。乍併、一八六六年以來、殊に一八七〇年以來、社會狀態の變革は行はれ、これとともに、舊國家の解體は萬人の眼前において、且つ著しく發展しつつある調子で行はれたのである。……要するに、舊國家のすべての要素の分解、絶對君主制のボナパルト的君主制への推移は最も急速に行はれてゐる。而して來るべき大商工業恐慌によつて、現在の欺瞞のみならず、舊時のプロイセン國家そのものも破壊せらるゝのである。(註五)

註三 Engels, Ursprung der Familie etc. S. 178 西雅雄氏譯本三〇九頁。

註四 Engels, Ursprung. S. 180. 譯本三一一—三二四頁。

## 二

國家の社會に對する依存性、即ち社會の一機關または產物としての國家は、自然發生的に見て、社會に對して、一の後天的性質を有するものである。國家は一の歴史的範疇に屬する。エンゲルス曰く、「國家は永劫の昔から存在するものではない。國家なくして濟み、國家及び國家權力について、何等の豫感をも持たなかつた社會が曾て存在した。階級への社會の分裂と必然的に結びつけられた、經濟的發達の一定の階段において、この分裂によつて、國家は必要となつたのである。」(註六) 然らば、この「國家なくして濟み、國家及び國家權力について、何等の豫感をも持たなかつた社會」から如何にして國家は發生したのであるか。吾々は再びエンゲルスの一般的敘述を引用せざるを得ない。

「唯物的見解によれば、歴史における最後の決定要因は直接的な生活の生産及び再生産である。然し、これはそれ自身また二種類である。一方には生活手段の、衣食住の對象及びそれに必要な道具の生産、他方には、人間それ自身の生産、即ち種の繁殖がこれである。その下において、一定の歴史的時代及び一定の國土の人々が生活するところの社會制度は、二種類の生産によつて、即ち一方には労働の、他方には家族の發達段階によつて、制約される。労働の發達が幼稚であればあるほど、その生産物の量、従つてまた社會の富が、制限されてゐればあるほど、それだけ社會秩序は血族紐帶によつて、支配されるものの如く見える。然るに、この血族紐帶に基礎を置く、組織の下において、労働の生産力は愈發達する。その私有財産及び交換とともに、富の差別、他人の勞働力の利用性、従つて、階級對立の基礎、即ち何代もの間徒らに古き社會制度を新しい事情に順應させようとする努めつゝ、遂に兩者の不調和が完全な變革に導くところの、新しい社會的要素が發達する。血族紐帶に基く古い社會は、新しく發達した社會階級と衝突して粉碎される。その後には、國家に結成されたる、その構成單位は最早血族團體ではなくて、地域團體たる新しい社會が出現する。そのうちにおいては、家族秩序は全く私有財産秩序によつて支配せられ、而して、そのうちにおいては、今や、すべての從來の書かれた歴史の内容を成す階級對立及び階級闘争が自由に展開する

ところの社會である。(註七) これによつて、見れば、國家は一の歴史的範疇に屬するものであつて、従つて、國家の本質を論ずる場合には、必ずその發生原因について論ずるところがなければならぬ。而して、國家の發生原因に關する研究は國家發生以前の社會組織に關する研究を包含しなければならぬのである。この點はマルクス社會學の方法論上から必然的に了解せらるべき點である。(註八)

註六 Engels, Ursprung, S. 182, 譯本「三一六頁」。

註七 Engels, Ursprung, S. VIII, 譯本「二三頁」。

註八 これらの點について、マルクス・エンゲルスの國家理論の完成者ニコライ・レニンは、その「國家について」と題する講演のなかで次のやうに云つてゐる。

「人類が小種族のうちで生活し、まだ發展の低段階に立つてゐた原始社會においてはすなはちまだ野蠻に近い狀態のもとにおいては、現代の文明人は、數千年隔つた時代においては——かゝる時代においては、國家の存在に對する何等の徵候も見出しえない。吾々はそこに風習の支配を、種族の最年長者が享受した權威、尊敬、權力を見うける。また吾々はこの權力を屢々婦人が有してゐたことを見うける——當時における婦人の狀態は、抑壓せられ何等の權利をも有してゐない現代婦人の狀態とは、全く異なつてゐた

やうに思はれる。しかしながら、他人を支配するために自己を分離し、統治するに都合の好いやうに、また統治するため體系的に永續的に、或る一定の強制装置すなはち一の暴力装置——今日では周知の如く、武裝せる軍隊の諸組織、監獄、その他、他人の意志を權力に服従せしめるための諸手段がこれであり、それは正に國家の本質を成してゐるものである——を所有してゐるところの人間の特別の範疇は何處にも見ないのである。

「もし吾々が謂はゆる宗教的教義や、狡猾なる手管や、哲學的構成や、ブルジョア學者が組み立てるところの諸種の思想やらから眼を轉じて、事物の眞の本質を探究するならば、國家なるものは、畢竟するところ正に人類社會から分離された斯かる統治装置であることを知るであらう。たゞ統治することのみを仕事とする統治のための強制的特殊装置、他人の意志を權力のもとに服従せしめるための特殊装置——監獄、人間の特殊の組織、等々——を必要とする特殊な人間の一團が現はれるとき、そのとき吾々は國家を有するのである。

「いづれにせよ、まだ何等の國家も存在せず、普遍的關係、社會自體、規律、勞働の秩序が慣習や傳統によつて、または種族の最年長者あるひは婦人の享受してゐた權威や尊敬によつて、維持されてをり特殊の範疇の人間——支配するための専門家——の存在しなかつた時代があつたのである。歴史は

示してある、人間の特殊の強制手段としての國家なるものは、社會の階級への分裂——すなはち或る集團が他の集團の勞働を絶えず占有しうるやうな、一方が他方を搾取しうるやうな、人間の集團への分裂——が現はれた時と處とにのみ發生したさいふことを……

「もし吾々がこの基礎的分裂の觀點から國家を觀察するならば、吾々は社會の階級への分裂以前には、既に述べたやうに、何等の國家も存在しなかつたことを知るであらう。階級への社會的分裂が發生し確立すると同じ程度で國家も發生し確立する……」(河上肇著マルクス主義經濟學の基礎理論二四六—二四八頁の引用による。)

## 三

成熟したマルクシズムの立場、殊にエンゲルスによれば、國家發生以前の原始的社會形態の存在したことは、最早疑ひのないところであり、且つ最近のマルクス主義者の間にあつても、前掲レニンの引用文が明かに示してあるやうに、この點に關する見解は一致してゐるやうである。たゞマルクス初期の著作についていへば、この種の社會形態について、多少の問題を提起し得るのである(註九)。

註九 福田徳三著、唯物史觀經濟史の出發點の再吟味、上册改造社はこの點に關する

るマルクスの見解に對する文献史的研究である。未だ上册のみではあるが、この問題に對する最も精しい長論文である。

問題は「共產黨宣言冒頭の一句に關する。人も知るやうに、共產黨宣言第一章は、『すべての從來の社會の歴史は階級闘争の歴史である。自由人と奴隸、貴族と平民、領主と隸農、組合の親方と職人、簡單にいへば、抑壓者と被抑壓者とは、絶えざる對立のうちにあつて、あるひは隠れた、あるひは公然の絶ゆるとなき闘争を續けてゐる。この闘争は、何時も、全社會の革命的改造をもつて、または闘ひつゝある階級の共倒れをもつて、終るのである。』(註一〇)といふ一句をもつて始まつてゐる。『すべて從來の社會の歴史が階級闘争の歴史である』とするならば、この命題の必然の結果として——即ち國家なるものは階級闘争の一機關として成立するものであるから——國家のない社會は存在しなかつたことにならねばならぬ。もしさうだとすれば、既に説明した後期におけるマルクシズムの見解との間に大なる逕庭が存することになる。何と云へば兩者は互に相撞着する提言だからである。この故にエンゲルスは、後に至つて『すべての從來の社會の歴史』といふ點に一の脚註を施したこ



ともまた周知のことである。その脚註にいふ。

「即ち充分にいふならば、記録として残された歴史の謂である。一八四七年には、すべての書かれた歴史に先行した、社會の前史、社會組織は、尙ほよく知られてゐなかつた。そのとき以來、ハックスタウゼンは、ロシアにおける土地共有財産を發見し、マウラアは、それをもつて、すべての獨逸の種族が歴史的に出發した社會的基礎として證明した。かくて、徐々に人々は、共同土地所有を有する村落共同體がインドからアイルランドにいたるまでの社會の原始形態であつたことを發見した。最後に、この自然のまゝの共產主義的社會の内部組織は、その代表的形態において、氏族の眞の性質並に、種族におけるその地位に關するモルガンの榮譽ある發見によつて、明かにされたのである。この原始的共同體の解體をもつて、社會の特殊なる、而して、最後には、相對立する階級への分離は始まつたのである。」(註一〇)

註一〇 Marx u. Engels, Kommunistisches Manifest, herausgegeben von Kautsky. 1922. Ss. 25-26. この部分の翻譯は河上肇博士によつてなされてゐる。同著唯物史觀研究一〇三

一一〇四頁、筆者は少しくその譯文を變へた見たところがある。他の譯本引用の場合も、特に斷らないが、變更した場合がある。

註一一 Das Kommunistische Manifest. Ss. 25-26.

この脚註が何時附け加へられたかについては、正確のことは判明しない。然らば問題は「共產黨宣言」以前に、この自然的共產主義的社會形態について、マルクス・エンゲルスが關説したかどうかといふことになる。マルクスは「共產黨宣言」以前において、原始的社會状態について、何等の知識を持つてゐなかつたのではないといふ推斷はほゞなし得るであらう。一八四二年「歴史的法学派の哲學的宣言」と題する論文の中で、所謂人類の自然状態に關説してゐる。「第十八世紀の通用してゐた擬制は、自然状態をもつて、人間性の眞の状態として、觀察した。人は自らの眼をもつて、人間の理念を見やうとして、その素樸性が毛のある皮膚にまで及んでゐる自然人たるババゲノスと呼び出した。第十八世紀の最後の十年間に、人は、自然民族における原始的眞理を豫知した、而して、吾々はすべての方面から鳥差しが、イロケエゼン、インド人等等の鳴き方を眞似て囀つてゐるのを聞いた。彼等は、この方法で鳥そのものを係蹄に陥すことが出来るかと考へたのである。この奇矯性には、

この素樸なる状態が眞の状態の素樸な和蘭風の繪畫であるといふ正しい考へが、その根底に横はつてゐる。(註一二)この人類自然状態に關する言説は、勿論自然法學說における自然状態と密接な關係があるのであらうけれども、第十八世紀末葉のアメリカ原始種族の發見は、實證的方法をもつて、これらの原始種族を觀察する傾向を帶びしめ、引いては、自然法說における孤立的個人または家族の擬制から、原始には大家族が存在するといふ説を發生せしめ、從來の原始的社會觀に對して、一の變革を齎らしたのである。(註一三)かくの如く觀察して來れば、マルクスは、共産黨宣言以前においても、原始的状態、即ち國家なき状態に關する若干の知識を有したものと云へやう。

註一二 Das philosophische Manifest der historischen Rechtsschule aus dem literarischen Nachlass von Marx etc. I. Bd. S. 268.

註一三 拙著近世社會學成立史一〇五頁以下。

更らに、一八四五年執筆の「ドイッチェ・イデオロギイ」におけるこの問題に關する提言は注目に値するものである。マルクストリエンゲルスは、この長論文において、

明かに、國家の發生並にその私有財産との關係を明確に認識した。人類史の始原において、生ける個人はその生命を維持するために、生活手段を生産しなければならなかつた。これが人間の最初の行爲であつたのである。この行爲は人間對自然の交渉を發生せしめるとともに、他の人間との交渉をも發生せしめる。かゝる生産から發生する關係とともに、人間には、性的區別が存してゐて、生命の發展とともに、男女の關係が生ずる。而してこの男女の關係は、夫婦關係、親子關係、即ち家族關係たるに至る。この家族は、最初には唯一の社會的關係である。(註一四)

註一四 Marx-Engels Archiv. I. Ss. 245, 246. ドイッチェ・イデオロギイの社會學に關しては拙稿「ドイッチェ・イデオロギイ」マルクス社會學「昭和四年十月號」改造所載を参照。

この家族はその内部における分勞の増加と、これに伴ふ生産の増加によつて更に他の家族との交渉が起り、數家族の結合が社會的結合の基礎たるに至つて、唯一の社會關係たる地位を喪ふのである。家族における分勞は先づ性的分勞であるが、この分勞の結果は對立した家族に社會を分立せしめる。即ち社會的分勞が

これである。これと同時に、質的にも量的にも不平等勞働並に、その生産物の分配が行はれる。こゝに至つて、家族内における妻女とその子女とが男子の奴隸である。奴隸は最初の私有財産であつて、この男子の私有財産を擁護すべき共同的利益から發生し、現實の個別的並に全體的利益から區別せられた獨立の形態を採る組織が國家である。故に國家は私有財産並にこれに根據を置く階級と不離の關係にある。(註一五)然らば、國家と密接な關係を有する私有財産は如何にして發達したか。ドイッチェ・エイドオロギイは財産形態の發達を次のやうに記述してゐる。

「所有の最初の形態は、古代世界においても、また中世においても、種族所有これであつて、羅馬人においては、主として戦争によつて、ゲルマン人においては、牧畜によつて條件付けられたものである。古代諸民族においては、殊に羅馬及スバルタ——一の都市に多くの種族が共に住居してゐたために——種族所有は國家所有として、現はれる。而して、公人のそれに對する權利は單なる占有(ボセシオ)として現はれる。此のボセシオは種族所有そのものと同様に、土地所有にのみ限られてゐる。本當の私有は、古代民においても、現代諸民族におけるが如く

に、動産をもつて始まる。——(奴隸及び共同體)ドミニウム・エツキス・ユーレ・キリトム——中世から發生する諸民族においては、種族所有は、種々な階段——封建的土地所有、團體的動産、マヌファクトールの資本——を通過して發展して、現代の大工業及び世界的競争によつて條件づけられた資本、純粹なる私有財産——それは、共同體の一切の外觀をぬぐひ去り、而して、所有の發展における國家の凡ての作用影響を杜絶したところの——に到達したのである。この現代的私有財産に現代的國家が照應する。……ブルジョアジイは一の階級であつて、最早一の等族でないから、最早地方的でなく、民族的に、それ自らを組織すべく餘儀なくされ、而して、その平均利益に、一の普遍的形態を附與すべく餘儀なくされてゐる。私有財産が共同體から解放せられたので、國家はブルジョア社會と併立し、又その外に立つところの一の特別の存在となつた。乍去、國家はブルジョアが内と外とに對して、その所有とその利益との(共同の)相互の保障のために必然的に與ふる組織の形態たる以外の何ものでもない。……

私權は、私有財産と時を同ふして、原始發生的共同體の解消から發展するもの

である。羅馬人においては、私有財産及び私權の發展は、それ以上の工業的及び商業的結果を伴ふことなくして終つた。何となれば、その全生産方法は同一のものたるに止まつてゐてから。現代の諸民族においては、封建的共同體は工業及び商業によつて解消せられてから、私有財産及び私權の成立と同時に一の新しい態様——それは更らに進んで發展の能力ある——が始まつた。(註一六)

註一五 Marx-Engels Archiv. I. Ss. 248-251.

註一六 Marx-Engels Archiv. I. Bd. Ss. 298-299 の一節 福田徳三博士の譯文を借用した。

同著唯物史觀經濟史成立點の再吟味、上册、一二七——二九頁

マルクス・エンゲルスは「ドイッチェ・イデオロギイ」の最後の部分において、分勞と財産の形態」と題して再び財産の形態を論じてゐる。

「分勞の種々異つた發展階段形態」はまた同時に所有の種々異つた形態である。換言すれば、分勞のその時々々の階段は、また勞働の原料、器具及び所産との關係における各個人相互の諸關係を定める。

所有の最始の形態は、種族所有である。それは一民族が、狩獵、漁撈、牧畜、又はせいぜい農耕によつて、生活するところの生産の發達してゐない階段に相應す

る。農耕によつて、生活する場合においては同時に未墾地の多く存在することを前提とする。分勞はこの階段においては、未だ甚だ少しか發達せず、唯だ家族の内に興へられてある自然發生的の分業の一延長たるに止まる。社會的分岐は、家族の一延長に限られ、家長的種族會長、その下に種族成員、その下に奴隸あるに止まる。……第二の形態は、古代の地方體及び國家所有である。それは、幾多の種族が、契約又は征略によつて、一の都市に結合することから、起り、奴隸制度は前の如く存續するのである。地方體所有と併んで、既に動産は發達し、時を経るに従つて、不動産も發達する。乍去、それは一の異例として、而して、地方體に從屬する一形態として止まる。國家の臣民は、唯その團體に於てのみ、勞働する奴隸に對して、權力を有つに止り、従つてそのため、地方體所有の形態に拘束されてゐる。……

第三の形態は封建的または等族的所有ある。……これは種族所有及び地方體所有のやうに、一の共同體の上に築かれたものである。乍去、この共同體には、古代における如き奴隸でなく、體僕、小農民が、直接生産階級として對立してゐるの

である。……封建時代においては、主たる所有は、土地所有に存し、この土地所有は、一方には、その上に拘束せられてゐる體僕の勞働、他方には、土地所有は、一方には、その上に拘束せられてゐる體僕の勞働、他方には、自己勞働とゲゼレの勞働を支配する小なる資本と結び付いてゐる。(註一七)

註一七

Mark-Engels Archiv, I. Ss. 303-306. 福田徳三前掲書一二九—一三一頁。

「ドイッチェ・エーデオロギイ」に於ける財産形態論はこゝでその原稿が切斷せられてゐる。乍併、吾々はこれまでの説明で、彼が國家發生以前の社會をその考案に入れたことを知り得るのである。彼は、家族が唯一の社會的關係であつた原始的時代を認識したのである。而して、彼によれば、この原始時代は、財産形態論中における第一の形態種族財産形態に照應するものであることは、「ドイッチェ・エーデオロギイ」の前後の關係から明かであるといはねばならぬ。故に前段からすれば、家族——分勞の發達——家族の結合——私有財産及び階級の發生——國家の發生といふ順序をもつて、發展し來る社會的過程を認識した。而して、私有財産は「原始發生的共同體」の解消から發達したものであるから、私有財産發生以前の、従つて、國家發

生以前の社會形態を「原始自生的共同體」と見たことには何等の疑問もないのである。而してこの原始自生的共同體に於ける所有關係は種族財産であり、その時代は既に引用したやうに、生産發達せず、僅かに狩獵、漁撈、牧畜、初期の農耕を行つてゐたのである。従つてこの時代においては、分勞は未だ發達せず、ただ家族内に興へられてゐる自然發生的の分業の一延長たるに止まり、「社會的分岐もまた家族の一延長たる家長的種族會長、その下に種族員、その下に、奴隸があつたのに止まつてゐる。

かく見て來ると、こゝでマルクスのいふ原始自生的共同體といふのは、後期のマルクス・エンゲルス、殊にエンゲルスの「家族、私有財産及び國家の起源」(一八八四年)に現はれてゐるが如き原始的共產主義の社會形態と完全に一致するものではない。それは恐らく、第十九世紀の中葉までの原始社會觀を支配してゐた原始的家長的大家族制からヒントを得たものであらうと思はれる。既に記したやうに、自然法學說に於ける孤立的個人または家族説は第十八世紀に至つて崩壞して、所謂「社會の自然論」を主張する社會的自然主義者のアメリカ蠻民などの材料による大



家族制説をもつて、これに代へたのであつた。アダム・フーグスは最大の代表者であつた。(註一八)然るに、マルクスの最も影響を受けたヘンゲルも、原始社會の出發點において、家長的大家族制を置いてゐる。(註一九)この二つの事柄は、マルクスのいふ「原始自生的共同體が如何なる意味のものであるかを理解せしめるのに、極めて重要であると思はれる。それは國家發生直前の社會形態と見られたものであつて、かのエンゲルスによつて記述せられた氏族制度の末期の状態を示すものである。氏族制度についてエンゲルスはいふ。「すべてのその幼稚と單純にも拘らず、この氏族制度は、一つの驚くべき組織であるし、軍隊、憲兵及び警官なく、貴族、國王、總督、知事または裁判官なく、監獄なく、訴訟なくして、萬事が秩序正しく進行する。……世帯は多くの家族に共同であり、且つ共產主義的である。土地は種族の所有である、たゞ圍圃だけは一時世帯に割りあてられる。……貧者及び窮乏者はあり得ない——共產主義的世帯及び氏族は老者、病者、及び戰爭不具者に對するその義務を辨へてゐる。すべての人々が——女もまた——自由であり、平等である。」(註二〇)かくの如き氏族制度、原始共產主義に關しては、マルクスもエンゲルスもともに、一

八四〇年代において、知ることが出来なかつたのである。マルクス・エンゲルスは、この時代において、原始自生的共同體に關する社會學的認識を甚だ輕視したものであるといはねばならぬ。かゝる見地から見てこそ、「共產黨宣言」冒頭の一句「すべての從來の社會の歴史は階級闘争の歴史である」といふ文章の意義を解することも出来る。「賃労働と資本」(一八四九年)における古代社會、封建社會、ブルジョア社會といふ人類の歴史における發展階段の區別を理解することが出来るのである。(註二一)

註一八 拙著近世社會學成立史、第三章

註一九 Heinrich Cunow, Die Marsche Geschichts-, Gesellschafts- und Staats- theorie. I. Bd. S. 239 ff.

註二〇 Engels, Uprung, S. 90 譯本、一五七——一五八頁

註二一 「賃労働と資本」の中における當該文章は次の如くである。

「かくて各個人がそのうちにおいて生産するところの社會關係、社會的生產關係は、物質的生產手段の、生産力の變動および發展と共に變化する。生産諸關係はその總和において、社會關係社會と名づけられるところのもの、ものを構成し、且つ實に、一定の、歴史的の發展階段における一の社會を、固有の特殊の性質を有する一の社會を構成する。古代の社會、封建的社會

有産者の社會は、かやうなる生産諸關係の總和であつて、その各々が同時に人類の歴史における一の特定の發展階段を表示してゐるのである。」  
Marx, Lohnarbeit und Kapital, neu herausgegeben von Karl Kautsky, 1922, S. 25. 河上肇譯「賃勞働と資本」マルキシズム叢書第七冊四六—四七頁

## 四

初期のマルクス・エンゲルスによつて、比較的研究の對象とならなかつた彼の所謂原始自生的共同體が、彼等の注目するところとなつたのは、何時の頃からであるか。筆者はこれに對して、一八五〇年代においては、少くともマルクスは、原始自生的共同體研究に志す意志があつたものと思ふ。それは、マルクスが、一八五三年に、ニウヨーク・トリブュンのために書いた支那及び印度に關する評論の中に現はれてゐるところから推してである。(註二)マルクスは、この支那及び印度に關する評論の中で、近代歐洲殊に英國の資本主義が支那及び印度に對する侵略的政策を如實に描いてゐるのであるが、その印度の社會組織の根柢をなすものは、村落共同體であることを述べ、その英國資本主義の侵略による崩壞の過程を描いてゐる。而して、村落共同體については、次のやうに記してゐる。

「この二つの事情、即ち一方においては、ヒンヅウ人がすべての東洋諸民族と同じやうに、農業及び商業の基礎である包括的な公共事業に對して配慮すること、を中央政府に委任した事實、他方においては、全國に散在してゐるこの農業と商業とが、農業的並に手工業的勞働の家内の結合によつて、たゞ小中心に集合してゐた事實、——この二つの事實は、考へ得る時代以來、一の特殊な社會組織、即ち所謂村落組織を形成した。この村落組織は、これらの小中心のすべてに對してその獨立の組織とそれ特有の生命を與へたのである。この組織の特性については、吾々は、次の印度の事項に關する英國下院の舊い公式の報告から採つた敘述を基礎として、一の判斷を與へることが出来る。

『一の村落は、地理的に見れば、數百または數千エーカーの耕地及び休耕地を包含する。政治的見地からすれば、それは都市團體に類似する。その役員並に使用人は次の如く示されてゐる。ポタイル即ち共同體の主長は、一般に、村落の事務を監督し、住民の係争を調停し、警務を監督し、その村内における租税を徵收する。この義務に對しては、彼の個人的勢力と住民の状態と事務とに對して、充分

に精通することが、彼を最適任たらしめる所以である。クルムムは土地耕作を監督し、これに關係あるすべてのことを處理する。タリイルとトチイとがこれに次ぐ。前者の任務は、犯罪並に違反に關する報告の作成並に一村から他村に旅行する人々の護衛及び保護から成り立つのである。後者の活動範圍はこれに反して、村落自體に限らるゝが如くである。彼の職分は就中、收穫の保護とその評價における援助である。境界見張番は、村田境界を見張り、また疑問の場合には、その經過に就いて説明する。堰及び水道の監督は、農業のために、水を分配し、婆羅門は村の神事を司り、學校長は村童に砂の上で読み書きを教へ、最後に、曆事婆羅門または占星者などがある。この官吏及び使用人が大體、村落の行政機關を形成する。乍併國の多くの地方においては、この機關は、かくの如く分化してゐないので、そこでは上記した義務及び職分の多くが、一人に歸してゐるのである。これに反して、他の地方においては、この行政機關は、上記した官吏の數を超してゐるのである。』

かくの如き村落行政の單純な形態の下に、住民は太古以來生活して來た。村

の境界は、たゞ稀れにのみ變更せられ、而して、村落は、往々戦争、饑饉、または疾病のために困窮し、または全然破壊せられたにも拘らず、その名稱、境界、利害、否、家族すら數百年を通じて同一であつたのである。住民は王國の滅亡もまたその分割に對しても心を痛めなかつた。…就中、その内部經濟は、一指を染めらるゝことがなかつた。

社會有機體のこの小さな固定した形態は、大部分崩解し、または消滅せんとしつゝあるのであるが、それは、英國徵稅吏並に英國兵の慘酷な干渉のためといふよりは寧ろ、英國の蒸汽機關及び英國の自由貿易のためである。この種の家族共同體は、手織、手紡績及び手營農耕の特殊な結合における家内工業にその基礎を置いた。而して、そは、彼等をして、自己供給者たらしめたのである。英國の干渉はこの小なる半野蠻、半文明の共同體の經濟的基礎を破壊し、かくて、嘗てアジヤの經驗した最大の、且つ眞實に唯一の社會革命を遂行することによつて、それを解體したのである。』(註二三)

註二二 このマルクスの支那及び印度に關する評論は三篇から成つてゐて、リヤ

ガノンによつて編纂せられて、公刊せられてゐる。Karl Marx über China und Indien. mit Einleitung von Rjasanoff. Unter dem Banner des Marxismus. Jahrgang I. Hft. Nr. 2. Ss. 370-402.

註二三 Unter dem Banner des Marxismus. I. 2. Ss. 388-389.

マルクスはこゝで、社會有機體の小さな固定的形態である村落共同體が太古の昔から存して、現在では既にその遺物として見らるべきことを注意してゐる。かゝる共同體は、その上に對する支配的勢力の變化に適應して、その生存を續け、現在においては、世界の活動と切り離された矮小なる世界として有しつゝも、尙ほその内部における貧富の懸隔並に奴隸制度の存在を指摘してゐるのである。(註二四)而して、彼は印度における英國資本主義の使命を二つ擧げてゐる。「破壊的なるもの及び創造的なるものこれである。即ち一面においては、古代アジヤ的社會組織の破壊、他面においては、アジヤにおける西洋的社會制度に對する物質的前提の作出である」としてゐる。(註二五)

註二四 Unter dem Banner des Marxismus. I. 2. Ss. 389-390.

註二五 Unter dem Banner des Marxismus. S. 398.

印度に對する英國資本主義の使命に關する論文を書いた頃のマルクスとエンゲルスとはともに東洋諸國に關する事項を興味をもつて研究してゐたらしい。それは、彼等の往復書翰が明かにこれを示してゐる。例へば、一八五三年六月二日のエンゲルス宛のマルクスの書翰には、「ベルニエーは何等の私有財産も存在せずといふ點に東亞——彼はトルコ、ペルシヤ、ヒンドスタンについて語つてゐる——の全現象に對する基本形態を見出してゐるが、正當なことだ。これは東亞の天地に對する實際的の鍵である」といつてゐる。(註二六)これに對して、エンゲルスは六月六日附の書翰に次のやうにいつてゐる。「土地所有の存在せざることは、事實において、全東亞に對する鍵である。この點に政治的及び宗教的歴史があるのだ。だが、東亞人らが土地所有をもたず、嘗て封建的土地所有も有しなかつた所以は、如何なる點に歸因するのだらう？わたしは信ずる、それは主として地勢、特にサハラ砂漠から、アラビヤ、ペルシヤ、インド及び韃靼を横切りアジヤの最高高地地方にまで及ぶ大荒野地帯に關係する氣候に存すると。人工的灌漑がこゝでは農業の第一條件であり、そして、これは町村州縣あるひは中央政府の仕事である。東亞における

政府は常に三個の部局、財政(國內の掠奪)戦争(國內及び國外の掠奪)及びトラヴァー・ブプリ(再生産の世話)を有する。インドにおける英國政府は第一第二を稍やより町人的に規定し、第三を全然側へなげやつてしまつた、かくてインドの農業は衰滅した。(註二七)同じ六月十四日附のマルクスの書翰も東洋諸國における所有問題に及んでゐる。(註二八)

註二六 Der Briefwechsel zwischen Marx u. Engels, Bd. I, S. 413. マルクス・エンゲルスの手紙三

高橋正男譯二九二頁。

註二七 Briefwechsel, I, S. 415. 譯本三、二九八頁。

註二八 Briefwechsel, I, Ss. 420-421.

かくの如くにして、マルクス・エンゲルスの社會的認識は、徐々に、東洋諸國における土地共有の事實に向けられつゝあつたのである。

### 五

「共產黨宣言」のエンゲルスの脚註によれば、ハックスタウゼンは一八四七年にロシア農民間における土地共有制を發見し、一八五六年に、マウラアは獨逸種族における土地共有制を發見したのである。(註二九)乍併、マルクス・エンゲルスに對して、

原始土地共有制、更らに廣くいへば、原始的マルク組織に關する活眼を開かしたものは、マウラアなるかの如くである。マウラアの著書は、一八五六年刊行の「獨逸におけるマルク制度の歴史」である。(註三〇)この書は五百頁の大冊であつて、マルク共產體に關する殆んどすべての問題を包含してゐる經濟史上の名著であつて、殊にマルク制度の内容を歴史的に解剖して、マルク制度なるものが、獨逸の原始的時代における支配的社會組織であり、當時殘存してゐたマルク組織はその遺物と見るべきことを論證したのである。(註三一)而して、マウラアのマルク制度の研究は、クノウの見解によれば、一八六八年に至つて始めて、マルクスの知るところとなつたのである。(註三二)マルクスは一八六八年三月十四日附の書翰の中次のやうにいつてゐる。

「序でながら、博物館において、就中老マウラアの獨逸のマルク、村落等の制度に關する最近の諸著作。彼は、土地私有財産が始めて、後に至つて、成立したことをなごを充分に立證した。獨逸人は、各人が獨りで移住し、そして、始めてその後、村落からなごが形成せられたといふ馬鹿氣たウエスフアッヤの貴族共の見解(モエ



ザア等は完全に斥けられた。土地の一定期間における(獨逸では最初年々行つた)再分配に關するロシアの方法が獨逸においても、處々において第十八世紀、否第十九世紀までも殘存してゐたといふことは甚だ興味あることである。即ち歐洲においても、いたるところにおいて、アジア的自至はインド的財産形態がその初期を形成するといふ私の嘗て主張した見解は、こゝに(マウラアはそれについて何事も知らないとはいへ)一の證明を得たのである。老マウラアの著作(一八五四年及び五六年等)は眞に獨逸人的博識をもつて書かれたものである。(註三三)

註二九 Das kommunistische Manifest. S. 25-26.

註三〇 Georg Ludwig von Maurer, Geschichte der Markenverfassung in Deutschland. Erlangen 1856.

註三一 マウラアのこの書に關する邦文研究文献としては次の如き研究がある。石濱知行、マルク共産體の研究、社會科學大正十四年十一月號。

註三二 Cunow, Marxsche Geschichts, Gesellschafts und Staatstheorie. Bd. II. S. 92.

註三三 Briefwechsel, IV. S. 23-24. マウラアの著作として、一八五四年及び一八五六年とあるのは、前掲の通り、一八五六年刊行であるから、何かの思ひ違ひであらう。

マウラアの著述は甚だ深い感銘をマルクスに與へたに相違ない。マルクスは別の書翰においても、彼の諸書は非常に重要なものである。獨り原始時代のみならず、その他の發展の全體即ち自由帝國都市、不輸の采地主、公權自由農民と體僕との間における鬭争等は、彼れによつて、全く新たな面目を與へられた」としてゐるのである。(註三四)

註三四 Briefwechsel, IV. S. 29.

### 六

マルクスがマウラアの諸書を偶目したのが、一八六八年のことであるとすれば、彼は既に「經濟學批判」(一八五九年)を書き、資本論第一卷(一八六七年)を出してゐる。即ちこの兩著作における原始的社會組織に關する言葉は彼のインド及び支那に關する評論の直ちに後に來るべき性質のものである。吾々は、今マルクスが兩者において、原始的社會組織について如何なる態度を採つてゐるかを記するであらう。

「ドイッチェ・エ・イデオロギイ」「共産黨宣言」哲學の貧困等において、發展せられたマ

ルクスの社會學的理論は、更らに一八五九年刊行の「經濟學批判」においてその代表的な字型を得るに至つたのである。「經濟學批判」はもとより經濟現象、殊に市民的社會の經濟的解剖をその任務とするものではあるが、社會理論に對しても、甚だ重要なものを包含してゐる。マルクスは先づその「序説」において、人類文化史の出發點が、孤立的個人ではなくして、所謂社會化せる個人であることを宣言する。

「私が茲に取扱はんとする對象は先づ物質的生產である。」

社會において、生産しつゝある人々が——従つて人々の社會的に規定せられたる生産が、おのづから、本書の出發點である。スミスおよびリカードがそれをして始めた所の、かの離群索居の獵夫や漁夫は、十八世紀の創意力に乏しき幻想に屬する。それらは、ロビンソン物語であつて、決して、文化史家の想像するやうに、たゞ過度の文化に對する反動や、誤解されたる自然生活への復歸やを現はしてゐるものではない。それらが、斯かる自然主義に立脚せざるは、かの生れながらに獨立せる主體を契約によつて、關係せしめ結合せしむるところの、ルーソーの『社會契約』と異なるところはない。これらは大小のロビンソン物語の假象、單なる審美的假象である。寧ろそれは十六世紀のかた準備をなし、十八世紀において、その成熟への大進歩をなせし『市民的社會』を豫想するものである。自由競争の行はれるこの社會においては、個人は、それ以前の歴史時代において、彼を一定の限られたる人間集團の所屬員たらしめたる、自然的紐帶等から解放されて現はれる。スミスおよびリカードが尙ほ全くその影響の下において第十八世紀の豫言者たちは、一方においては、封建的社會形態の崩解の、他方においては、十六世紀以來新たに發展せる生産力の産物たるところの、十八世紀のこの個人をば、過去に存在せし理想として、頭に泛べてゐたのである。歴史的結果としてではなく、むしろ歴史の出發點として。

この個人は合自然的なもの、如く見え、且つ人間性に關する彼等の觀念に適應してゐたが故に、それは歴史的に成立したものと見え、むしろ自然によつて定立されたものと見えたのである。(註三五)

註三五 Zur Kritik der politischen Oekonomie. 9. Aufl. S. XIII. 宮川實譯、經濟學批判、序説三一—四頁。

人類原始における孤立人の假定を斥けたマルクスは、如何なる立場を採つたか。それは孤立人の假定に對しては、正反對の所説である。彼はいふ。

「我々が歴史を遠く遡れば遡るほど、個人は従つてまた生産する個人は、非獨立的な、一のものより大なる全體に屬してゐるものとして現はれる。最初には尙ほ全く自然的な方法で、家族に、および種族にまで擴大されたる家族に、後には種族の對立と融合とから生じたる種々なる形態の共同團體に。……社會の外部における孤立せる個人の生産といふことは、——それは稀には文明人が偶然に荒野に迷ひ込んだ場合に起り得るのであるが、かゝる文明人は既に諸々の社會力を能動的に有してゐる——共に生活し、共に語る個人なくしての言語の發展といふに等しく、一の背理である。」(註三六)

註三六 Zur Kritik, S. XIV. 譯本四一五頁。

歴史の初期において、個人が屬するといふ、一のものより大なる全體」とは何を意味するのであるか。マルクスは、「序説」の他の場所で、財産形態の發展に關説してゐるが、それがこの説明に該當すべきものであるやうである。彼は生産と財産との關係

についていふ。「總ての生産は、或る一定の社會形態の内部において且つその媒介によつて、個人が行ふところの、自然の擅有である。この意味において、財産が生産の一條件であると云ふことは、同義反覆である。しかし、このものから、財産の一定形態に、例へば、私有財産に、飛躍をするのは、笑ふべきことである。(なほその上に、私有財産はその反對の形態たる無財産をも、その條件として前提してゐるものだ)。歴史の示すところによれば、むしろ共有財産(例へばインド人、スラヴ人、古代ケルト人等とにおける)が財産の本源的形態である。そして此の形態は公共團體の財産といふ姿容のもとに、尙ほ良く一の重要な役割を演じてゐるものである。」(註三七)

註三七 Zur Kritik, S. XVIII-XIX. 譯本一一——一二頁。

マルクスはまた他の個所において、吾々がすべての文化民族の歴史の初期に於て見るやうな、自生的形態における共同労働といふ言葉を用ゐてゐる。(註三八)而して、これに對して脚註をつけて、次のやうにいつてゐる。

「近時、自生的共有財産制はスラヴ民族に特有なる形態であるといふ思想、或は全くロシアのみ存する形態であるといふ思想が擴まつてゐるが、それは

笑ふべき偏見である。共産制は社會の一原始的形態であつて、吾々はそれがロオマ人に於ても、ゲルマン人においても、ケルト人に於ても、存在してゐた事を證明することが出来る。然し、その種々様々の見本を有する完全なる見本臺紙が、印度人の間に於て、一部分亡びゆく状態においてではあるが今も尙ほ存在してゐる。アジア的の、殊にインド的の共有財産形態の充分なる研究は、如何にして、自然發生的共有財産の種々なる形態から、その解體の種々な形態が生ずるかを證明するであらう。例へば、ロオマ及びゲルマンの私有財産制度の種々なる原始的タイプは、インド共産制の種々なる形態から導かれ得るのである。(註三九)

註三八 Zur Kritik, S. 9. 譯本本文一五頁。

註三九 Zur Kritik, S. 9. 譯本一五—一六頁。

而して、かくの如き自生的共産制における生産が、商品生産であるか否かの點について、マルクスは、商品生産と原始共産制との交渉を論じてゐる。「實際において、商品の交換過程は、最初に、自生的共同體の母胎内に現はれるものでなく、自生的共同體の盡きるところ、その境界に於て、それが他の共同體と接觸する二三の場所に

於て、現はれるのである。斯かる場所に於て物々交換は始まる。そして此處から共同體の内部に侵入してゆき、共産社會をば崩解せしむるのである。(註四〇)

註四〇 Zur Kritik, S. 30. 譯本四六—四七頁。

以上の説明を聞いて、吾々は、マルクスの「研究の導きの絲となつたところの、一般的結論」に對すべきであらう。(註四一)吾々はこの「一般的結論」の中に、「經濟社會構成の進歩の階段」を見ることが出来るのである。「吾々は極く大づかみに、亞細亞的の、古代(ギリシヤ・ロオマ)的の、封建的の、及び近代資本家的の、生産方法をもつて、經濟社會構成の進歩の階段となすことが出来る」と。(註四二)吾々はこの社會發展の階段における「亞細亞的生產方法」の何を意味するかを既に知つたのであり、マルクスがその「賃労働と資本」における社會發展階段の區別、古代的、封建的、並にブルジョア的社會としたものに對して、アジア的社會を附加したのは、五十年代におけるマルクスの原始社會に關する認識の發展を示すものといはねばならぬ。何故に、原始自生的共同體における生産を「アジア的」と名づけたかの理由は、吾々の知り得ざる——少くとも、本文の筆者には——ところであるが、それは、この自生的共同體がその崩壊

過程において種々な形態を採りつゝ、良くアジャ、殊にインドにおいて、殘存してゐた事實に歸すべきものであらう。

註四一 Zur Kritik S. LV. 譯本、序言三頁。

註四二 Zur Kritik S. LVI. 譯本五頁。

## 七

「資本論」におけるマルクスは大體において「經濟學批判」におけるマルクスと同一の立場に立つ。既に社會構成の最初の階段としてのアジャの社會を認めた彼は、「資本論」においても屢々アジャの社會の土地共有制について述べてゐるし、彼が「經濟學批判」においても、土地所有制をもつて、スラヴ民族の、殊にロシアにのみ存在する制度とする説を嘲笑した個處は、「資本論」においても第二版註として、引用されてゐる。(註四三) 故に、マルクスの立場は、兩者同一といつて差支ないであらう。彼はいふ。

「古代におけるこれらの社會的生產組織體は、ブルジョアの生產組織體に比すれば、遙かに單純にして透明のものである。然し、これらの生產組織體は個々人が彼等を相互に結合してゐるところの自然的種族關係の臍の緒から未だ斷ち

切られて居らぬ、個人的發達の未熟狀態か、又は直接の主従關係かの、いづれかに立脚するものであつて、勞働生産力の發達が尙低級段階に止まり、随つて物質的生活の生産行程の内部における人類の關係、換言すれば、人と人、人と自然との間における關係が尙ほ局限されてゐることに制約されるものである。(註四四)

註四三 Das Kapital I. Vorlesung S. 41. 高島素之譯資本論一改造社版四八頁。

註四四 Das Kapital. I. S. 43. 譯本四九。

而して、マルクスは、かくの如き太古の社會共同體の内容を説明して次の如くいつてゐる。

「例へば、インドに於ける、かの矮小な太古的の共同體は、部分的には、今日尙ほ存續してゐる所であるが、それは土地の共有と、農業及び手工業の直接的結合と、新たな共同體の設立に當り、與へられたる方策及び設計として役立つ所の固定的分業とに、基礎を置いた。此等の共同體は、いづれも一百エーカー乃至一千エーカーの地域を占むる自足的の生産體を成して居り、生産物の主要部分はその共同體それ自身の直接の必要のために、造られるものであつて、商品として造られる



ものではなかつた。斯くて、此等の共同體に於ける生産それ自身は、インド社會全般に於ける商品交換に依つて媒介される所の分業からは、獨立したものとなつてゐたのである。而して、たゞ過剰の生産物のみが商品に轉化されたのであるが、それも部分的には、國家の手を通じて、初めて行はれるといふ有様であつた。インドに於ては、いつとも知れぬ古き時代から、一定量の生産物が物納地代として國家の手に流れ込むことになつてゐたのである。(註四五)

註四五

Das Kapital, I, S. 304 譯本一三三八頁。

而してマルクスは、この印度における村落共同體が元來支那においても、本來的形態であつたことを承認し、この共同體の商業資本による崩壊過程を資本論第三卷において、描いてゐる。「インド及び支那における生産方法の廣大な基礎は、小農業と家庭的工業との合一によつて、形成されてゐるが、インドではその上尙、土地共有に基く村落共同體といふ形態が加つて來る。尤もこれは、支那においても本來的形態なのであつた。インドでは、イギリス人たちは、支配者及び土地所有者として、此等の小さき經濟的諸共同體を破壊するために、彼等の直接の政治的權力と經

濟的權力とを同時に利用した。彼等の商業は、インドの生産方法に革命的の影響を及ぼしたのであるが、それは彼等が、廉價な諸商品を以つて、農工業生産の斯かる合一の太初的な必須成分たる紡績業及び機械業を破壊し、斯くして、此等の諸共同體を分解せしめる限りにあいて、言ひ得ることであつた。而もこの分解作用でさへ、極めて徐々と達成されたに過ぎぬ。支那においては、尙更らさうであつた。蓋し、支那では、直接の政治的權力を利用し得なかつたからである。農工業の直接の結合から生ずるところの大なる經費節約及び時間節減が茲では、大工業の諸生産物に對し極めて、頑強な反抗を興へる。蓋し、大工業に依つて供給される諸生産物の價格中には、産業の到る處に穿通されてゐるところの流通行程に伴ふ空費も含まれるからである。(註四六)

註四六

Das Kapital, III, 1. 6, Auf. S. 318. 譯本四二九二頁。

このインドにおける土地共有の村落共同體は、單にインドにおけるのみの現象ではない。「共同地(これは上述の國有地とは全く異つたものである)なるものは、元來古代チュートンの制度であつて、それが封建的上被の下に存續して來たの

である。(註四七)

註四七 Das Kapital I. S. 655. 譯本二七一九頁。

## 八

五十年代から資本論第一卷刊行の時代に涉つて、マルクスの原始自生的共同體に對する研究は、インドにおけるそれに向けられてゐたのであつたが、原始自生的共同體の存在が特にスラヴ的のものであるといふ主張と、これに伴ふロシアにおける社會運動の勃興とは、マルクスをしてロシア研究に向はしめたのである。マルクスは既に記したやうに、原始自生的共同體の存在をもつてスラヴ民族の特殊性に歸することを「笑ふべき偏見」として斥けたのであるが、尙ほ彼は全ロシアにおける共同體の存在とこれに關連したロシア農業事情とを研究せんとしたのである。マルクスのロシア研究について、資本論第三卷序文に、エンゲルスは次のやうにいつてゐる。「この地代篇については、マルクスは、十九世紀七十年代に全く新しき特殊研究をなしてゐた。彼は一八六一年の『改革』以後ロシアに於いて避けられぬ所となつた土地所有に關する統計的報告やその他の出版物を、彼の地の友人た

ちからこの上なく完全に供給されてゐたので、數年間に亘り原語でこれを研究して拔萃を作つてゐた。而して、彼れは此等の拔萃をば、本篇に新たなる手入れを施すとき利用しようと思へてゐたのである。ロシアに於ては、土地所有も農業生産者たちに對する搾取も、共に様々の形態を採つてゐた。そこで地代に關する篇の中では、第一卷の中で工業上の賃銀労働の分析について、イギリスが演じたのと同様の役割を、ロシアが演ずべき筈であつた。不幸にして、彼れはこの計畫を遂行し得ずに終つた。(註四八)

註四八 Das Kapital III. I. S. IX. 譯本四、序文五—六頁。

乍併、マルクス・エンゲルスはロシアにおける原始的共同體について、何ごともいはなかつたのではない。彼等は、機會ある毎に、これに對して、發言してゐたのである。勿論、この兩者はロシアに關して、體系的な著作を著はしてはゐない。その見解たゞ時々の論文または書翰の形態で發表されたのである。而してロシア共同體の問題は、ロシア特有の制度として、ナロドニキによつてその社會主義の根據とせられたのである。(註四九)かゝる見地からいつて、マルクス・エンゲルスのこの

問題に關する發言は、原始自生的共同體と將來の社會主義的社會實現との關係にあるので吾々にとつては甚だ興味を持ち得るのである。

註四九 伊藤秀一、露西亞社會運動史、第四章及び第五章。

ロシアの革命運動に對するマルクスの態度は時代によつて甚だ變遷した。六十年代においては、マルクスは、ロシア革命運動の眞面目さを信用しなかつたのである。マルクスに對しては、ロシアの革命運動家は貴族青年の時間潰しに近いものと見え、彼の著述の熱心な購買に對しては、冷笑的態度を示してゐたのである。彼は彼等の革命運動を美食漁りと同一視する態度であつた。(註五〇) 然るに七十年代の始めに至つて、ロシアにおける革命運動が益々強力となり、彼がラウロフ、ロバティンその他の革命家と知り合ふこととなつたとき、マルクスは次第にその態度を改めて行つたのであるが、尙ほ長くその批判的態度を捨てることがなかつた。例へば一八七七年においてさへ、彼はそのゾルゲに與へた書翰の中で、ペテルブルグにおけるカザン大寺院前での有名な大學生の示威運動を「馬鹿ごと」としてゐる。(註五一) 然るにマルクスのロシア革命運動に對する態度は、ロシアの革命家が

獨裁政治に對する直接の政治的闘争に移つたときに、決定的な變化を見た。マルクスは、何人にも増して、ロシア獨裁政治克服の大なる國際的意義を理解してゐたので、一八七九年以來、ロシア革命運動、正確にいへば、當時政治的闘争に向はんとしてゐた「民意黨」(Narodnaja Wolja)の同情的擁護者となつたのである。かくて、マルクスは革命運動の巨細について注意し、ロシア・テロリストの執行委員會と通信し、この委員會の在外國委員と交際した。而して、如何にマルクスがロシア革命運動に熱心な注意を向けてゐたかは、當時彼が「民意黨」運動に關する書類を多數に蒐集研究した事實がこれを示してゐる。——これらの書類は今獨逸社會民主黨文庫に保存されてゐる——マルクスは單にロシア革命運動を高く評價したのみではない。彼はまたロシアに於て、彼の發言を非常に重大視することを知つてゐたのである。かゝる事情の下にあつては、ロシア問題に關する彼の發言は甚だ用意周到ならざるを得ないのであつた。(註五二)

註五〇 Karl Marx Brief an Kugelmann, 1924. Ss. 47-48.

註五一 Briefe und Auszüge aus Briefen von Becker, Dietzgen, Engels, Marx u. A. an Sorge und Andere, 1921. S. 156.

註五二

B. Nikolajewski, Marx und das Russische Problem, "Die Gesellschaft" Juli 1924. Ss. 363-364.

かゝる事情の下にマルクスは、ロシア村落共同體と會社主義革命に關する短文を書いてゐる。それは、ロシアの婦人革命家ベエラ・ザスリッチに與へられた書翰である。この書翰は、最近發見されたその書翰の原稿とともに、マルクスのロシア村落共同體に關する意見を表現してゐる。ヴェラ・ザスリッチのマルクスへの一八八一年二月十六日附の書翰の重要な内容は次の如くである。

「あなたは、あなたの『資本論』がロシアの農業問題や農村共產體やに就ての私達の議論の上に演じつゝある役割は恐らく御存じないだらうと思ひます。この問題が、ロシアにおいて如何に緊切であるかは、誰よりもよくあなたが御存知のことです。……この問題は、私の考へますところでは、殊にわが社會黨にとり、死活の問題で御座います。……二つの見解の一つはかうで御座います。この農村共產體は、國庫の法外な誅求や領主への支拂や專斷な政治やから解放されるならば、社會主義の方向へ發達し得る、即ちその生産と生産物の分配とを漸次集産主義的基礎の上に組織し得ると云ふので御座います。この場合には、革命的社會

主義はその全勢力を農村共產體の解放と發達とに捧げねばなりません。

これに反しても、もし共產體が滅亡すべき運命にあるならば、社會主義者が社會主義者としてなすべきことは、何十年たつたらロシア農民の土地がその手中からブルジョアの掌中に歸するであらうか、何百年も経たら恐らく資本主義がロシアにおいても、西ヨーロッパに於けると同様な發達を遂げるであらうかを知るために、多少不確かな計算をこれととする外御座いません。この場合には、社會主義者は、共產體崩壞の結果、賃銀獲得のため大都會の街頭に投げ出さるゝ農民大衆の不斷の洪水に見舞はるべき都會の勞働者間に専ら宣傳を行はなければなりませんでせう。

最近私達は農村共產體は古代的形態であつて、それは歴史や科學的社會主義一言で云へば、より異論なき總てのものが、その滅亡の運命にあるを説いてゐるこの主張をよく聞きます。これを主張する人々は、特にあなたの門下即ち『マルクス』だと自稱してゐます。それらの人々の議論の最も強い根據は屢々『マルクス』がさう云つてゐる』といふことで御座います。

『然もどうしてそんな結果がマルクスの『資本論』から出て来るか。マルクスはその中で農業問題を論じてゐないし、又ロシアに就ても語つてゐないではないか』とそれからの人々に反問して見ます。

さうしますと、『もしロシアに就て論じてゐたら。マルクスはさつとさう云つたに違くない』と恐らく大膽過ぎると思はれるあなたの門下達は答へます。そこであなたは、この問題に對するあなたの御意見に私達がどんなに興味を持つてゐるか云ふこと、わがロシアの農村共產體の將來の運命についての、及び世界のすべての國々が資本主義的生活のあらゆる段階を通過する歴史的必然の理論についてのあなたの御考へを御洩し下さるならば、どんなに私達を裨益して下さるであらうかといふことを御了解下さつたで御座いませう。(註五三)

註五三

ヴェラ、ザスリッチとマルクスの書翰及び草稿は、佛文をもつて書かれてゐる。それは、リヤザノフによつて發表された。Vera Zasulich und Karl Marx.

Marx-Engels Archiv. I. Bd. Ss. 309-342. この全文の邦譯がある。山村喬譯、ロシア

農村共產體の研究——マルクスよりヴェラ、ザスリッチへの手紙、同人社版、引用はこの譯書による。同一五——一七頁。

マルクスはこの書翰に對して、一八八一年三月八日附をもつて答へてゐる。その重なる内容は次の如くである。

「……所謂私の學說に就ての誤解に關して、あなたのお疑ひを一掃するには、數行の説明で十分かと考へます。

資本主義的生産の成立ちを分析して、私は次の如くに申しました。

『故に資本主義制度の根柢には、生産者と生産手段との根本的分離がある。……總てかゝる進化の基礎は農民の收奪である。それが徹底的に行はれたのは、未だイギリス一國に過ぎない。……然し西、ヨ、ホ、ロ、ッ、パの他の總ての國でも、同じ道行をとりつゝある』(『資本論』佛譯版三一五頁)

故にこの道行の『歴史的必然』は、西、ヨ、ホ、ロ、ッ、パの國々に明かに制限されてゐるのです。何故にかく制限したかの理由は、第三十二章の次の節中に示されてゐます。

『自己の勞働に基礎を置く私有は、他人の勞働の搾取に、賃銀制度に基礎を置く資本主義的私有にとつて代られる』(同上三四〇頁)



故にこの西歐の道行においては、私有の一形態から、私有の或る他の形態への變化が問題なのです。これに反して、ロシアの農民の場合に於ては、彼等の共有を私有に變へることが問題とならなければなりませんでせう。

ですから『資本論』の分析は、農村共產體が生命を有すると云ふ説にも有しな  
いと云ふ説にも何等の根據をも提供するものではありません。然し、私がそれ  
に就て行つた、そしてその材料をオリヂナルな資料に求めた特別の研究は、私を  
して、この共產體がロシアにおける社會再生の支持點となるものであることを  
確信せしめました。然し、それがかくの如き働きをなし得んがためには、先づ、あ  
らゆる方面からこれを襲ふてゐる有害な諸勢力を絶滅し、次いで、自然的發達に  
必要とされる正常な諸條件をこれに確保しなければなりませんでせう。(註五四)

註五四　ロシア農村共產體の研究、六五—六七頁。

ロシア農村共產體と社會主義社會の實現に關するこの見解は、ブレハノフによ  
つてなされた「共產黨宣言露語譯に對するマルクス・エンゲルスの序文(一八八二  
年一月二十一日附)にも述べられてゐる。「急速に發展しつゝある資本主義的欺瞞

と、やうやく近時に至つて、形成されつゝあるブルジョアの土地所有と並んで、農民  
の共有に屬する大半の土地を、吾々はロシアにおいて見出すのである。そこで問  
題が起る。曰く、ロシアの共產體即ちこの實際上既に甚だしく分解しつゝある原  
始土地共有形態は、直接に土地所有のより高き共產主義的形態に移ることが出來  
るか——あるひは、それは西歐の歴史的發展を特徴づけてゐる解消過程を豫め通  
過せねばならぬのか、この問題に對して、今日唯一に可能なる解答は次の如くであ  
る。ロシアの革命が西歐に於ける労働者革命に合同を與へ、その結果兩者が互に  
補充し合ふならば、その時には、ロシアの土地所有は共產主義的發展の出發點とな  
り得る。(註五五)

註五五

Zizierle von Engels. Internationales aus dem Volksrat (1871-75) 1894. Ss. 66-67. 岡村貞三譯

國際問題、一三〇—一三一頁。

エンゲルスは、トカチヨフとの論争において、同じくロシアにおける農村共同體  
が最早その隆盛期を經過して、その解體に向ひつゝあることを認識しながらも、尙  
ほ土地のブルジョアの分割所有といふ中間段階を通過しないで、より高い社會形

態への推移が可能であるといつてゐる。「乍併、このことは、共同體所有の全部的崩壊以前において、西歐でプロレタリアート革命が勝利をもつて遂行せられ、そして、ロシアの農民はこの推移のための前提條件を、特にまた、この推移に必然的に結びついて居る耕作制度全體の變革を遂行するために、農民が必要とする物質的前提條件を提供する時にのみ、發生し得る。だから、トカチョフ氏がロシアの農民は『所有者』だが、西歐の無産労働者よりも『社會主義に接近して』居ると云つてゐるのは、純然たる誇大の言である。事實は全くその反對である。」(註五六) このトカチョフに對するエンゲルスの批判は、この當時の社會主義者が、ロシアをもつて、社會的に選ばれた國民なりとして、西歐のプロレタリアートの闘争からでなく、ロシア農民の最奥から、古い經濟社會の更生は來るといふ、この子供らしい見解に向けられたのである。(註五七) 而して、彼は農村共同體の無力を知つてゐた。「實際何時でも、そして何處でも、民族社會から傳來せる農業共產主義は、それ自身のうちから、自身身の崩壊以外の何ものをも展開せしめなかつた」といつてゐる。(註五八)

註五六 Engels, Internationales. S. 57. 譯本一一二—一一三頁

註五七 Engels, Internationales. S. 62. 譯本一一〇頁。

註五八 Engels, Internationales. Ss. 64-65. 譯本一一二六頁。

マルクス・エンゲルスは、ロシア農村共同體の問題に關する發言において、ニコライエフスキのいふやうに、周到な用意をもつて、彼の全理論をこの問題に適用することを保留したやうである。この事情は、例へばヅエラ・ザスリッチの場合について考へれば、マルクスが、前述のやうに、自己の言説のロシアにおいて重ぜられるといふことと、ロシア革命運動に對して、希望を持つてゐたといふことの外に、社會運動における黨派關係があるものと推測せらるゝ。ヅエラ・ザスリッチへの解答が書かれた當時(一八八〇年代の初め)のロシア革命運動には、分裂の兆候が現はれたのである。直接政治闘争への推移は、民意黨中に分裂を齎らした。政治闘争の反對者は、バクーニン主義の基礎の上に立つものであつて「黒分黨 (Ischoriny Peredjel) を組織した。この「黒分黨」の組織者は、アクセルロット、ブレハノフ、ヅエラ・ザスリッチであつた。然るに、彼等は、獨逸社會民主黨の攪亂者ヨハン・モストに對して、機關紙を提供してゐたことは、マルクスの好意を増す所以ではなかつたし、またマルク

スの態度は當然であつたのである。かくの如き事情から、マルクスのヴェラ・ザスリッチに對する解答には、ある種の保留がなされたものと見るべきである。然るに、政治闘争の反對者であつた彼等は、その後直ちにバクウニン主義からマルクス主義に轉向し、ロシア・マルクス主義運動の先頭に立つべき運命にあつたことは、マルクスもまた知らなかつたところである(註五九)。だから、エンゲルスのトカチョフ批判追記——これは一八九四年に執筆されたものである——には、可成に、ナロドニキたるトカチョフの批判を行つてゐるのである。

註五九

Nikolajewski, Marx und das russische Probleme. Ss. 365-369.

## 九

農村共同體と社會主義社會實現の問題から離れて、原始自生的共同體の社會學的問題に移らう。ヴェラ・ザスリッチに答ふべきマルクスの書翰草稿には、右の問題に對する若干の材料があるからである。

マルクスは、原始共同體の一般性を主張してゐる。遙か以前に遡れば、西ヨオロッパの到る處に、多少古代的タイプの共有が見出される。然るに到るところ、それは社

會の進歩とともに消滅した。(註六〇)彼は更に云ふ。「タキッスの時代以後は、吾々は、(ゲルマン人の)(農村の)(古代的)共產體の生活についても亦その消滅の仕方や時期に就ても、少しも知るところがない。ユリウス・カイザアの物語のお蔭で、少くともその出發點はこれを知ることが出来る。カイザアの時代には、耕作し得る土地は既に毎年割替を行はれてゐた。尤もいろいろのゲルマン聯邦の血族や種族の間にであつて、まだ共產體の個々の成員の間にはなかつたが、それ故農村共產體は、ゲルマンに於ても、一のより古いタイプから發生したのである。それは全く完成された形でアジアから輸入されたものではなくて、ゲルマンにおける偶生的發達の産物であつたのである。東インドでも亦吾々は共產體に出會はずであらう。そしてそれは常に古代的組立ての最終點若くは窮極期としてである。(註六一)

註六〇 ロシア農村共產體の研究、一九頁。

註六一 ロシア農村共產體の研究、二四—二五頁。

次にマルクスは、農業共產體とより古代的な形態のそれとの比較對象を行つてゐる。

「先づ第一に、前の原始的な諸共產體は總てその成員の自然的血縁關係に基礎を置く。この強い、然し、狭い紐帶を破つてゐる農業共產體は、より多く周圍の事情に順應したり大きくなつたり、外來人との接觸に耐えたりすることが出来る。次に農業共產體では、早やその附屬物たる中庭は既に農民の私有になつてゐるが、農業の導入そのものの前永い間、共同の家は以前の諸共產體の物質的基礎の一つであつたのである。最後に、耕地は農村の共有であるが、それは定期的に農業共產體の成員間に割當てられ、以て各農民が自己に割當てられた土地を自己の計算で耕作し、各自その收穫をわがものとするやうになつてゐる。然るに、より古代的な共產體においては、生産は協同で行はれたゞ、その收穫を分配するに止まつてゐた。かゝる集合的な若くは協同的な生産の原始的タイプが孤立せる個人の無力の結果であつて、生産手段社會化の結果でなかつたのは云ふまでもない。」(註六二)

註六二 ロシア農村共產體の研究、二五—二六頁。

ヴェラ・ザスリッチに與へたマルクスの書翰並に、その草稿に現はれたところは、

大約以上の如くであつて、それは要するにロシア農村共產體と社會主義との關係を中心としての農業共產制に關する一發言なのである。

要するに以上、長く書き來つたところを概括して見れば、農業共產體または、原始的共同體に關するマルクスの認識は、一八四〇年代においては、甚だ不徹底なものであつたといへる。「ドイッチェ・イデオロギイ」は國家の家族並に家族の擴大たる種族からの發展を論じ、更らに、種族財産に言及してゐるのではあるが、その意味するところは、既に述べたやうに、國家發生過程にある社會組織を意味した如くである。だから、彼は「賃労働と資本」及び「共產黨宣言」にはこの不十分な認識をなきものとして、古代的社會を人類文化史の出發點に置いた。然るに五十年代に入つてから、マルクス・エンゲルスの眼は、英國資本主義の東洋における活躍とともに、印度及び支那に向けらるゝに至つたのであるが、彼等はこゝに、原始自生的共同體の殘存物を發見したのである。一八五三年の印度並に支那に關する評論に現はれたところはこれである。かゝる社會的認識の眼界の擴大は、「經濟學批判」並に「資本論」において、原始社會形態としての自生的共同體存在の主張となつたのである。

かくて彼は一八六八年に至つて、マウラアの著作に親んで、獨逸民族のマルク制度に關する深き歴史的研究に自己の認識の正しさを覺えたのである。而して、ロシア社會運動の特殊性はマルクス・エンゲルスをして、ロシアにおける農業共產體の觀察をなさしめるに至つた。

以上の農業共產體の研究は、主として、その解體期における共產體の研究であつて、既に資本主義的侵略の始まりつゝある時代のそれであつた。然るに、彼等のこの問題に關する研究は以上に止まつたのではない。一八七七年におけるルイス・モルガンの「古代社會」の刊行は、マルクス・エンゲルスの原始社會研究に一の衝動を與へたものであつた。この氏族制度の本質の「眞の發見者」はエンゲルスをして、更に深く原始社會組織の研究をなさしめた。マルクスもそこから、その書を基礎として、それを遂行する筈であつた。このためマルクスはモルガンの著述から幾多の拔萃を作りこれに注意、説明、批評を加へてゐた。然るに彼の重り行く病は遂にこの計畫の成就を彼に許さなかつたのである。エンゲルスはマルクスに代つて、この事業をなした。彼はこの著作をもつて、マルクスの遺言施行といつたのは

このためであつた。それは「家族、私有財産並に國家の起源」一八八四年である。エンゲルスはこの書において、モルガンに従つて、アメリカインデヤン族、獨逸、ギリシヤ、ロオマに於ける氏族制度とその崩壞による國家の成立を論じてゐる。筆者は他日稿を新たにして、エンゲルスによる氏族制度の研究とその崩壞過程並にその批判を試みるであらう。

## 附記

本稿は始め原始共產體の研究から、その原始的形態たるギリシヤ、ロオマ、獨逸における氏族制度とその崩壞と國家の成立を論ずる筈であつたが、あまりの長篇となるのを恐れて、中途に擱筆したものである。他日機を得て、氏族制度と國家の起源について、更らに詳細な紹介評論を試みたいと思ふ。本稿は實にその序説と見らるべきものである。(一九三〇・一・一九。稿了)